

第三 其彫刻的遺物の様式の如きも、西印度彫刻の源流が犍毘羅彫刻とは關係なきを見る上の資料となすに足るものである。

而して其銘文が印度の一般歴史研究上にも、幾多

## 日本のビスマルク

文學博士 甲

陰

今茲に太平洋を東航中の私には、かゝる折に惠まるゝなる一種特有の閑日月こそあれ、同じ甲板の上に米、英、露、獨、支、比、暹なんどの幾多の異人種や、様々の使命を帯びた色々の職業風俗の人たちを乗せた船中の目狂はしい生活に入り浸つたこの旬日、とても纏つた勉強氣分の起りさうにない、けふまでにやつと、四十頁未滿の一小冊子だけを讀み上げたばかりである。これは、恐らく

の參考すべき根本資料たる點に於て、此洞窟は西印度に存する多數の石窟寺のうち、最も注目すべきものゝ一と云はねばならぬものである。(未完)

ばこの航海中の唯一の讀書となつて了ひさうである。さうして思ひ返すと、この著書は、確かに同人諸君の一顧に價ひするやうに考へられるから、一筆これを御見參に入れたい。

『國民主義が、國家組織の基礎となつてゐる世界史的時代において、凡そ一國の内部に於て廣大な變化を實行完成した國々の内で、まさしくやつと、嫌やゝながら外國との通商貿易を開いた、あの

東亞の島帝國に於けるほどの偉いものはない。この場合、ペートル大帝によつてロシアの歐洲化された際に、西洋が嘗め味つたのと同じ一大體驗がより、速かな歩調の進みで繰り返されたのである。

即ち一般普通の文化の採用に、どこまで擴りゆくべきか何人にも豫想しえない一個の急激な國力發展が、結び付いてゐることは是れである。しかし、

ロシアでは專制獨裁のツァールたちが實行した、その同じ仕事をば、日本では、これと同時に相互

に政權の爭奪戰を行はなければならぬ若干數の努力向上しつゝある政治家が成し遂げたのである。彼等の内で成功と名聲とで頭角を露はしてゐるのは、一九〇九年十月二十六日ハルビンで暗殺された伊藤公であつて、世人から「日本のビスマルク」と呼ばれた位だ。吾人は茲にこの英雄の生涯記述と同時に、日本が、最も進歩した民族たちの收奪のまゝに任かされた一個の中古的化石の國土から

一躍して、政治上經濟上勢力の影響が、他の世界の國々へ波及して、それらから長敬される一個の現代的大國へと如何にして長足の大進歩を遂げたかといふ疑問に對する理解を把握せうと思ふ。』

それが、本とはスツットガルト伯林獨逸出版協會本年出版の『政治の棟梁』Meister der Politikの内に收められてゐる筈のリース博士の近著の一つ『伊藤公』(私は只だ抜刷を讀むばかり、即ち六二一—六五七頁)の冒頭の辭である。

それで、この驚嘆すべき長州藩足輕出身の天才の生ひ立ちと幕末維新における内外の大波動との交渉を首めとし、明治初年において、この青年政治家が、日本最初の鐵道の開設、工部大學の創立等の文明開化事業に如何に參劃したかが説かれ、薩長土肥の抗爭、封建の遺習の打破、條約改正の進行、薩長の藩閥政治と議會政治の開始との經緯、更らに日清、日露の風雲の生動と收拾、元老政治

家の勢力（元老を元老院と混同した形跡が見ゆるのは本著に於て私の氣付いた唯一の小瑕瑾である六五二頁）及び新進の文武政治家の輩出などが、それ／＼次ぎ／＼に可なりの造型的明確さを以て描き出されて居る。凡そ外人著者にして、己が文明政治家として世界的偉人に屬する伊藤公の眞面目を、かくまでの的確に把握しうるものは、多年日本の社會に親炙して得られた體驗的知識から出來上つた『日本からの草々』 *allerlei aus Japan* の著者にして、終始世界的見地の高處に立てるリース博士を措いて、他にその人は尠からう。就中、

それ／＼日本人の參考になるのは、日本のビスマルクの生涯の主要なモーメント毎に、しば／＼適切なバラレルレやコントラストの方法が世界史上から用ゐられてゐることであらう。例へば、伊藤公晩年の畢生の事業たる朝鮮統治を描き、その寛大仁惠なる文明的施設を賞賛して後、著者は、公

が統監として活動した五年間に傳道學校をば文化傳播者として獎勵し、剩へこれに金錢上の保護さへ賜はつたと指摘し、「何せなら宗教上偏見は日本のビスマルクには全然知られなかつたのであるから」と理由づけ、暗にかの文化闘争の宰相と相對照してゐるが如きである。

終りに、この評論的傳記の結語の内から、その大部分を譯出して、著者とその主人公との面目を二つながら躍動せしむるがよからうと思ふ。

『もとは歴史家ツキディデスが、テミストークレスに對して下し、それから、ハインリヒ・フォン・ジューベルがビスマルクに移した判断は、これまた伊藤公にも當て徹る。即ち「彼は彼の稟性の力と一寸の考慮とによつて、何ものが最も正しきかを瞬間的に發見抽出するといふ長所をば、高き度合において所持してゐた」ことである。……彼が企てた事物が悉く成功したのではない。しかし、

彼は終始自家の大規模の名譽心に取つて何か新しい使命を見出し、いつとも自ら満足に感じうるために、力強き感激を必要とした。かくて彼は

藩閥的感情の束縛から國民的統一精神に向つて歩み出し、次に立憲事業の成功の後には、世界的政治家の見地に進み、以て彼の天性に適合するなる西ニウスデウスチデンツ洋アたましいをば東亞の地盤に移植し、かくて蒸氣電氣の支配する時代に於て回教徒の國土へ諸印度が蒙らなければならなかつた危險を防遏せうと努めた。革新好きな、しかし一切の反動を早くふせぎ止め、意志強い、しかも尙ほ矯め直ほされやすい明治年間の日本の政治は、之よりも一步先きに進み出てゐて、さうして之を遂に帝國主義へまで導いて行つた伊藤公に於て、その最も完全なる體現を見たのである。』

五月下旬、ホノルゝに入港せんとする東洋汽船會社の一汽船のサルーンにて、六十年前、長藩の

脱走青年俊助らが、英國帆船の船員となつて喜望峰廻りの長い困難な航路を辿りて渡英したる當時を回顧しつゝ記す。